

保育者養成校における民舞「荒馬」に関する研究 —領域「表現」の指導及び教育方法論との関連に着目して—

塩田 桃子*, 平山 裕基**, 星川 佳加**

要約

本稿では、O短期大学の授業実践である民舞「荒馬」が保育者養成校において果たしうる役割について実証的に明らかにすることを目的とし、実践の概要を捉えたうえで「荒馬」に取り組んだ学生のレポートである質的データに関して計量テキスト分析を用いた内容分析を行った。その結果、学生の「荒馬」経験の特徴として、「荒馬の出会いと自己の成長」、「学びの姿勢と他者との協働的な楽しさ」、「実際的な学びとしての授業」、「相互的な学びと本番の達成感」、「民舞『荒馬』に込める願い」、「責任感の芽生え」、「自己効力感の向上」を示す7つの要因が抽出された。これを踏まえ考察を行った結果、第一に民舞「荒馬」は新しい教職課程における領域「表現」の指導として特に「楽しさ」や「協働」「他者」と関わって高い教育的効果をもつものであるということ、第二にこれは養成校における科目横断的な学びの側面を持ち教育方法論等と連携しうるということ、第三にこれは人と人をつなげるものとして今日の学生が抱える課題に答えるものであるということが明らかとなった。

キーワード：荒馬・領域「表現」・教育方法論・幼児体育・内容分析

2019年9月27日受理（教育研究）

I. 序論

1. 研究の背景および問題の所在

1) 新たな教職課程への対応の必要性

2016（平成28）年11月に教育職員免許法の改正が行われ、教職課程をもつ保育者養成校（以下、養成校）においては、新たな教職課程のカリキュラム改編への対応が求められた。新しい教職課程では、免許状取得に必要な科目区分について、これまでの「教科に関する科目」、「教職に関する科目」、「教科又は教職に関する科目」という3区分から、教科の専門的内容と指導法を一体的に学ぶことを可能とする「教科及び教職に関する科目」として統合された。この新しい教職課程において、幼稚園の場合は、2018（平成30）年度実施の幼稚園教育要領に示す5領域（健康、人

間関係、環境、言葉、表現）の教育内容に関する専門知識を備えた専門性と、5領域に示す教育内容を指導するために必要な力という二つの側面を関連づけるため「領域及び保育内容の指導法」に関する科目が創設された。文部科学省は、この教職課程の大括り化により、新たな教育課題に対応できる教職課程の改善を図ることで、より実践的指導力のある教員の養成およびその資質向上を目指している。

新しい教職課程によって、これまでの「教科に関する科目（小学校の国語、算数、生活、音楽、図画工作、体育）」が「領域に関する専門的事項（幼稚園教育要領で定める健康、人間関係、環境、言葉、表現）」へ変更したことに伴い、それぞれの養成校においては、この「領域に関する専門事項」と「保育内容の指導法」

*大阪健康福祉短期大学

連絡先：塩田 桃子

〒590-0075 堺市堺区南花田口町2丁3-20

大阪健康福祉短期大学 子ども福祉学科

E-mail: momo@kenko-fukushi.ac.jp

**大阪健康福祉短期大学

の連携強化が課題として挙げられている。したがって、従来の科目のなかで取り扱っていた教育方法および教育効果についても、新しい教育課程において、これらの課題に対応し、高い教育水準が確保されるのかといった授業内容の見直しが必要とされた。

こうした状況の中で、既に多くの養成校においてこれまでの授業を振り返り捉えなおす研究等が行われている¹⁾。O 短期大学もまた、保育士・幼稚園教員養成を担う場の一つとして授業に対する考察に取り組んでいる²⁾。この姿勢は今後他の授業に対しても向けられて然るべきである。その際、特に独自性をもつ取り組みに焦点をあてることで、他の養成校或いは他の学校階梯の教育に対しても貢献しうる研究が可能なのではないかと考えられる。

現在、O 短期大学における授業実践のひとつに民舞「荒馬」がある。「荒馬」とは、青森県今別町に伝わる荒馬踊りを基にしたもので、現在も多くの学校や保育所等でその実践がされている。O 短期大学では、これまで「教科に関する科目」における「体育」のなかで「荒馬」を扱ってきたが、新しい教育課程においては「領域に関する専門的事項」の領域「表現」として位置づく。したがって、これまでの授業実践で行ってきた「荒馬」の取り組みに関して、領域「表現」という新しい枠組みにおける教育的効果についても向き合う必要があるだろう。

2) 科目横断的な学びの必要性

また、「荒馬」の取り組みは「体育」および領域「表現」の授業に限らず、養成校における科目横断的な学びという視点からも注目に値する。高等教育段階における体系的な教育課程の策定や科目横断的な学びは今日強く求められているが³⁾、こうした社会的要請に加え、保育・幼児教育の特質をふまえると、とりわけ保育士・幼稚園教員の養成においては科目横断的な学びが重要であると考えられる。

O 短期大学においては、「保育実習」及び「実習指導」を軸としてカリキュラムが構成されており、既に一部の科目については他科目との連関を意識した授業づくりが行われている⁴⁾。今後もこの方向性を重視し、より多くの科目においてそれぞれの専門性を維持しつつも科目横断的な学びを意識した授業づくりを進めることが望まれる。

O 短期大学で取り組んでいる「荒馬」を含む民舞とは、民衆の生活から生まれたものであり、そこには労働も祈りも含みこまれている⁵⁾。すなわち民舞は本質的に多様な側面をもつものなのである。これを踏まえると、O 短期大学において取り組まれている民舞「荒馬」には科目横断的な学びを実現する要となる可能性があるのではないかと考えられる。

3) 若者のつながりの希薄化

さらに、「荒馬」を含む舞踊の特徴として、「舞踊する子どもと見る子どもとの間、またともに舞踊をつくる者同士の間、心と心との結びつきが生まれ、人間同士としての連帯と愛情が育まれていく」ことが指摘されている⁶⁾。これは、養成校を含む教育の場において「荒馬」に取り組む意義の一つである。というのも、今日若者の人とのつながりが希薄化していることが問題視されているからである⁷⁾。O 短期大学においても、学生が他者とつなげられない場面について教職員間で問題が共有されることが少なくない。

これまで、「荒馬」が学生同士をつなげる効果をもつのではないかということが、指導者によって経験的には感じられてきた。また、保育園における「荒馬」の取り組みにおいても、これが子どもと子どもをつなげる力をもっているということが、実感を伴って語られてきた⁸⁾。この点について、より実証的に迫る必要があるのではないかと考えられる。

2. 本研究の目的

以上のことから、本研究の目的は、O 短期大学の授業実践である民舞「荒馬」が養成校において果たしうる役割について実証的に明らかにすることである。その際、以下の3つの視点から分析と考察を行う。第一に、これが新しい教職課程における「領域及び保育内容の指導法に関する科目」「領域に関する専門事項」の「表現」の指導としてどのような教育的効果をもつものであるのか。第二に、これが科目横断的な学びの側面をもつ可能性を有するのか。第三に、これが人と人をつなげるものであるのか。

II. 研究方法

1. 研究対象となる授業

1) 教材の選択理由

O 短期大学では、2年次の選択科目において「幼児

体育Ⅱ」という科目を置いている。15 コマある内の8 コマを使って民俗舞踊（以下、民舞）「荒馬」に取り組んでいる。民舞「荒馬」を学習内容として位置づけて今年で9 年目となり、学生たちの中で定着してきている。2019 年度の履修者は、2 年生、7 名と授業実践者を含めて8 名という人数で実施した。はじめに、授業実践者がなぜ、本授業の中で、民舞「荒馬」を扱うのかということについて触れることにする。

そもそも民舞とは、「地域の風土と生活に根ざして生まれ、その地域に生きる人びとの共有の文化であった舞踊のこと」⁹⁾である。民舞は、祭りや直結しており、豊作、大漁への願いや喜び、安全祈願などの意味が込められ、継承されてきた。昔の人びとは、祭りによって自然の恵みに感謝し、喜びや苦しみを分かち合いながらつながりを大切にしてきた。そこには、人びとの「願い」や「思い」が込められており、どんな時にも、前向きに、本気で生き抜く力が踊りにおいて表現されているように思われる。

遊びやスポーツ経験を通して身体が耕されているはずの学生があまりに少ない現実と、人間関係の希薄化、成功体験が少ないことから、自分に自信がもてず、自己肯定感をもちつことができなかった学生に対して、この授業を通して耕し直し、仲間の中でより豊かにより自由に生きる力を育てることが、教育の課題であると考えている。今、目の前にいる学生たちが、これから社会で生き抜く力を育てるために、民舞が教材として相応しいと考え、本授業で扱うことにした。

ここで扱う「荒馬」とは、青森県今別町で年に一度、開催されている「荒馬まつり」で踊られている「今別荒馬」を指している。授業実践者は、2014 年8 月に「荒馬まつり」に参加し、2014 年9 月に開催された「全国今別荒馬のつどい～第10 回今別荒馬サミット～」において、「荒馬」の指導を受けた経験がある。また、その後も、京都において児童館が独自に開催した「荒馬」の講習会で、現地保存会から指導を受けたこともある。さらに、民間教育研究サークルである学校体育研究同志会において、教材化した「荒馬」を何度も踊ったことがある。これらの経験から、「荒馬」の踊りそのものに大変魅力を感じ、学生に伝いたい文化の一つとして、授業で扱うことにした。また、現

地へ足を運び、踊りを伝えてきた人々の「想い」に触れ、授業実践者がその「想い」をくぐらせて、教材化することが大切だと考えている。「荒馬は何のために何を教えるのか」。学生たちが「荒馬」を「真剣に踊る」ことを通して、「生きるための真剣な努力」の大切さに気付いてほしいと願っている。

また「荒馬」は、特別に洗練された踊りである。「たとえばある地方の荒馬は、特に決まりもなく、又はやしまでもなく、ただ、ただ、足まわっているだけの荒馬もあります。今別の荒馬は基本的に動きが、しっかりしている、太鼓の四つの節に合わせて、荒馬もその調子に、しっかり乗る、力強い踊り」(原文ママ)¹⁰⁾である。さらに、現地の「荒馬」は男女2 人組で踊られている。本授業で実践した「荒馬」は性別を問わずに踊れるよう、馬同士の2 人組で踊る方法をとっている。2 人組のペアで踊ることによって、目の前にいる仲間を感じ、仲間のエネルギーを感じながら踊ることで、自分を自覚することができ、自分の高まりを感じ、さらに相互の高まりが生まれるのではないかと考えている。

2) 授業の概要

続いて、研究対象である第1 回目から第8 回目の荒馬の授業について述べる。

①授業の目的・ねらい

子どもの豊かな心と身体を育む運動のあり方、進め方について理解し、説明ができる。

日本の民俗舞踊の歴史的な背景や継承の意義を追求し、踊りを習得するとともに、構成技術や表現力を身につけ、指導する上で大切なことや具体的な方法を説明することができる。

②授業全体の内容の概要

子どもの発達に応じた運動の指導方法について理解する。また、日本の民俗舞踊「荒馬」の継承について考え、実技を通して歴史的な背景や継承の意義を追求し、踊りの指導をする上での基礎を学ぶ。さらに、グループで共同創作する場を設け、子どもたちの前で発表を行う。

③授業終了時の達成課題

- ・民俗舞踊「荒馬」の踊りの歴史を学び、継承する意義について自分なりの考えを述べることができる。
- ・「荒馬」の基本動作を修得し、豊かな表現力を身に

つけ、発表することができる。

- ・現地の「荒馬」および保育現場で行われている「荒馬」の実践から学び、発達を踏まえた指導法を理解し、説明することができる。

④授業の内容・方法

- (1) 授業の概要・評価等を理解する。現地の荒馬や保育現場で行われている荒馬の実践から学び、ディスカッションを通して、荒馬の歴史や継承する意義について自分なりの考えを述べることができる。
- (2) 荒馬の基本動作を習得することができる。
- (3) 保育現場で行われている荒馬の実践から指導の基礎を理解し説明することができる。(ゲストスピーカー)
- (4) ペアで踊ることを通して、荒馬の表現力を高め合うことができる。
- (5) 荒馬発表会に向けて構成技術の基礎を理解し、グループワークを通して構成を高めることができる。
- (6) 荒馬発表会に向けて、表現力・構成技術を高めることができる。
- (7) 荒馬発表会を行うことができる。
- (8) 本授業での個々の到達を全体で共有しディスカッションを通して本授業のまとめを行う。

2. 調査内容

1) 授業実践および学生レポート

①第1回目

第1回目の授業では、オリエンテーションとして、授業の概要を理解すること、「荒馬」とはどのような踊りかを知ること、「荒馬」をどのような願いをもって踊るのかを考え合うこと、という3点が主な内容である。

「荒馬」をどのように出会わせるかということは、学生の意欲を引き出すために、特に重要であると考え、イメージがもてるように、現地、今別で行われている「荒馬祭」(以下、現地の荒馬)の映像と共に、宮城県のわらしこ保育園の卒園式で卒園児が踊る「荒馬」の映像を視聴した。

<学生の姿>

昨年度、大学祭で先輩が踊る「荒馬」を観ている学生もおり、「荒馬」がどのような踊りであるかはイメ

ージが持てている様子であった。

「荒馬」の踊りに込める願いについて、学生たちから出た意見は以下の通りである。

- ・保育士・施設職員になりたい
- ・元気になるたい
- ・幸せになりたい
- ・健康になりたい
- ・資格取得
- ・お金がほしい

いろいろな意見が出され、全員が共通である「保育士・施設職員になりたい」という願いをもって踊ることに意見がまとまった。

また、「荒馬」には、「ラッセラー」というかけ声がある。これは、「戦後に調子に変化してからの掛け声で、それ以前は『ラッセ、ラッセ』『ラセ、ラセ』というものでした。県内の下北や津軽各地のねぶたを引いて歩くときの昔の掛け声には、『出せ、出せ、ろうそく出せ、出さねばかっちゃくぞ』というようなものがあったといえます。断定はできませんが、全国的にも知られるようになった『ラッセラー』は、ろうそくやお菓子などをねだった『出せ、出せ』と無関係ではないだろう¹¹⁾と考えられている。このことを学生たちに紹介し、今回の「荒馬」で「ラッセラー」にどのような願いをもつのかについても話し合った。各々から意見が出されたが、最終的に「幸せになりたい」という願いを込めて踊ろうということで意見がまとまった。

「保育士・施設職員になりたい」、「幸せになりたい」という学生たちの願いを「荒馬」の踊りに込めて取り組むことを全員で確認し、本授業がスタートした。

②第2・3回目

第1回目の内容を振り返り、「荒馬」の踊りに込める願いを確認した。そして、発表会に向けての役割分担¹²⁾を行った。さらに、保育現場における「荒馬」の実践者である現役保育士(以下、D保育士)から、保育園で行われている「荒馬」の取り組みについて実践事例から学んだ。

また、Bこども園の協力の下、5歳児の子どもたちに授業に参加してもらい、D保育士による「荒馬」の指導を直接見て学んだ。学生が子どもと一緒に交流する場面もあった。

5 歳児の子どもたちが生き生きと楽しそうにあそんだり、踊ったりする姿から、保育において、単に踊りを教え込むのではなく、子どもたちが楽しみながら取り組むことの大切を学んだことが伺えた。以下、「子ども」と「楽しさ」に関連した記述を感想レポートから抜粋する。

<学生のレポートから抜粋>

- ・今日初めて荒馬をして、リズムとはまた違った楽しさがあったとても楽しかったです。それに D 先生の話の聞いて荒馬を運動会に取り入れるとなった時、皆でふりをそろえたりではなく楽しんでもらうというのを一番に考えているというのがすごいなと思いましたし、荒馬以外でも考えられるなと思いました。(中略) 5 才児一緒にした時に大人達だけでも楽しかったけれど子ども達としたらより楽しくなったのかどンドン声も出て笑顔も出てきてそういう姿を短時間で見れる事ができてとても嬉しかったです。
- ・今回 D 先生に教えてもらってすごく楽しくて、子どもたちとも楽しく荒馬が出来てとても嬉しかったです。
- ・運動があまり好きじゃない女の子が一人いて、そういった子とも「たのしいね」とお話をとおして仲良くできてよかったです。
- ・最初あんまり荒馬に興味なかったけど熱心に、楽しそうに教えてくれる D 先生見てると段々やりたくなって気持ちになってました。今回は B とも園の子どもたちと一緒にできたので子どもたちと一緒に荒馬を楽しむことが出来たと思います。

③第 4・5 回目

本授業では、「荒馬」の振りを覚え、自分なりの表現を楽しめるところを目指した。振りを覚えるために、指導者が何度も見本を見せながら、踊り込むことを中心に行った。それは、踊りこむことで、形や動きを覚える段階から自分なりに表現しようとする段階へ移行し、踊りの質が高まると同時に、踊りの喜びを感じることも出来ると考えているからである。先人たちが残してきた踊りへの願いや喜びに触れることで、自分たちが考えた、踊りに込める願いを仲間と共に共感し合えるのではないだろうか。

④第 6 回目

発表会直前の授業とあって、学生たちも少し緊張気味の様子であった。本授業では、発表会での隊形や構成を考えることが中心となった。観客となる子どもたちや後輩である 1 年生が見て楽しめるように、入場の仕方や、かけ声をかける順番、踊りの構成、隊形、立ち位置などを話し合ったり踊ったりしながら決めていった。

⑤第 7 回目：発表会

発表会当日は、45 分前に集合し、リハーサルを行った。緊張しているようにも伺えたが、時間と共に少しずつ気持ちが高まっているようにも見えた。そして、本番では、リーダーの「用意はいいかい」というかけ声に、全員が「いいよー」と答えてスタートした。「ラッセーラーラッセーラー」のかけ声に観客も一緒になって「ラッセーラーラッセーラー」と返す。ラッセーラーというかけ声に仲間が必ず返してくれるという安心感があるからこそ、自信をもって力強く声を出しているのだろう。学生たちは、目の前にいる仲間を見ながら、真剣な表情で踊っていた。踊りのペアを変える度に、それぞれのペアらしさが溢れる踊りとなっていたが、そこには、2 人でしか感じることでできない二人の新しい世界が生まれているようにも見えた。作品の最後は、全員が円になって踊る場面がある。そこでは、一人ひとりが躍動的に踊り、これまでに見たことがない集中と熱演で、熱気が会場に広がっているようにも感じた。踊り終えた後は、会場から大きな拍手が沸き起こり、学生たちは自信に満ち溢れた表情であった。

⑥第 8 回目

はじめに、発表会本番の映像を鑑賞した。そして、発表会後に提出した「荒馬のまとめレポート」を全員で読みあい、本授業のまとめとした。レポートのタイトルは自由とし、それぞれが本授業で学んだことや自身の変化、発見、今後の自身の課題等を思い思いに綴っていた。それを読む合う場面においては、全員が発表者に耳を傾け、読み終えた後は自然と拍手がわいていた。

2) 授業実践を振り返って

「荒馬」に出会い、仲間と共に「荒馬」を踊り、子どもたちや後輩たちの前で「荒馬」を発表することを通して、学生たちが変化していったことについて述

べる。

一つは、踊れなかった「荒馬」が踊れるようになることで、自分への自信を獲得したことである。初めて出会った「荒馬」に、当初はできないとネガティブになっていた学生たちが、荒馬実践者である保育士(ゲストスピーカー)と出会い、子どもとの交流や発表会を通して、踊れなかった自分と向き合い、それを乗り越えることができた事実がある。それは、発表会本番での学生たちが自信をもって生き生きと踊る姿があったからである。このことは、新しい自分との出会いとなり、さらに新しい自分をつくっていく機会になっていくのではないかと考えている。

二つ目は、一人ではなく、ペアで踊ることを通して、目の前に相手(仲間)がいて、相手(仲間)のエネルギーを感じながら、自分を自覚し、自分の高まりを感じつつ、相手との関係の中で相互に高まりが生まれていたことである。冒頭でも述べたが、人との関係をうまく構築することができなかつたり、人と向き合うことを避けてきたりした学生がいる中で、この「荒馬」をペアで踊ることで、相手を通して、自分を自覚することができ、そのことが人と踊ることの心地よさに気づくことができたのではないだろうか。一人で踊ることも趣があるが、2人で踊ることがより楽しいと感じる契機になっていたのではないかと考えている。

三つ目は、「見栄えではなく、楽しむことが大切」だということを、荒馬実践者である保育士(ゲストスピーカー)や子どもたちの姿から学んだ学生たちが、楽しみながら「荒馬」に取り組み、楽しさを追求した結果として「真剣に踊る姿」へ変わっていったことである。発表会本番での学生たちの真剣に踊る姿は、まさに、文化として「生きるための真剣な努力」をこの荒馬で表現しているように見えた。「生きることの喜び」を共感することができる「荒馬」を学生たち自身が創り出していったように思われる。

3. 調査対象

1) テキストデータの処理方法

本研究では、O短期大学の授業実践である民舞「荒馬」のもつ役割、すなわち「荒馬」の実践を通して得られた学生への教育的効果について実証的に明らかにするため、質的データであるテキストデータを対

象として、探索的かつ量的な視点による分析を可能とした計量テキスト分析¹³⁾¹⁴⁾を用いた。計量テキスト分析とは、「計量的分析手法を用いてテキスト型データを整理または分析し、内容分析(content analysis)を行う方法」¹⁵⁾である。実証的な教育研究の手法として、従来の研究では、その一般性を保証するために統計的手法等の一定の手続きが求められてきたという傾向が認められ、現場における質的研究に関しても、その質的データを分析するにあたり、その一般性の証明が課題として挙げられてきた¹⁶⁾。こうした課題に対して、この計量テキスト分析では、テキストデータを数的に扱うことで、データの内容分析をより客観的かつ詳細に行うことが可能となる。

2) 調査対象および手続き

本研究の調査対象は、O短期大学における授業「幼児体育Ⅱ」の受講生7名(男1名、女6名)である。質問は「荒馬」発表会の終了後にまとめレポートとして受講者に提示し、自由記述による回答を求めた。そして、受講者の回答によって得られたテキストデータを分析対象とした。具体的には、“この取り組みであなたにどんな力が育ちましたか？自分自身、なにか少しでも変化がありましたか？今回の取り組みの中で、感じたことや学んだことをまとめて下さい。”という質問を行った。なお、まとめレポートの手続き上、どの受講者にも自由記述とともにレポートのタイトルを考えさせたが、本研究においては受講者の自由記述から得られたテキストデータに焦点をあて分析を行うため、レポートのタイトルは分析の対象からは除外した。

自由記述から得られた特徴について、収集されたデータを分析するにあたって、テキスト型(文章型)データを計量的に分析する方法として提案された計量テキスト分析¹⁷⁾¹⁸⁾を用いた。実際の分析には、計量テキスト分析ソフト KH Coder¹⁹⁾を使用した。

Ⅲ. 調査データの内容分析

1. テキストデータの概要

被調査者の自由記述によって収集したテキストデータについては、まず、被調査者の自由記述内容における頻出語句を検索し、データ内容を示す語に注目するため、KH Coderの処理によって分析対象とす

る語句を抽出した。また、文章から自動的に語を取り出すと、例えば特定の意味をもつ「幼児体育」という言葉が「幼児」と「体育」という2つの語として認識されてしまうというように、語句の単位として重要性の高い1つの語として抽出されない場合があるため、その他の特定の語についても同様に抽出して語を指定した。さらに、収集された語句に「子」と「子ども」といった、文脈から判断して同じ意味合いをもつ語が抽出された場合、コーディングルールをファイルに記述することで一定の関連づけによるコードを与えることができるため、いくつかのテキストデータに関して文書検索から前後の文脈を判断（e.g., 「子」と「子ども」といった語であれば「子ども」として解釈）した上でコーディング作業を行った。最後に、抽出後リストや文書検索などから語の重要性を判断して、いくつかの語を使用しない語として指定した。

このようなKH Coderの処理によって、最終的に自由記述データの分析に使用される語句が抽出された（表1）。

表1 自由記述データの分析対象

	総抽出語数 (使用)	異なり語数 (使用)
学生まとめ	1,850	448
レポート	(665)	(303)

総抽出語数とは、分析対象ファイルに含まれているすべての語の延べ数であり、異なり語数とは何種類の語が含まれているかを示す数である。また、カッコ内の分析に使用される数値は、分析の対象としてKH Coderが認識している語の数であり、助詞や助動詞のように、どのような文章の中にもあられる一般的な語が除外され、最終的にカウントした値が示されている²⁰⁾。

2. 語彙頻度による分析

1) 形態素分析

まず、抽出語がどのような頻度で出てくるのか傾向を把握するため、形態素分析によってデータファ

イルに含まれる語とその頻度を求めた。形態素分析とは、対象となる文章について意味をもつ最小単位である形態素（名詞や動詞など）に分解するもので、語と語の間の明確な区切りのない日本語では、この形態素分析のような自然言語処理によって、文章から抽出語の出現頻度を確認することができる（樋口、2014）。この形態素分析の結果について、回答データから得られた上位30語を頻度順に示す（図1）。

2) 結果と考察

図1から、まず「荒馬」や「思う」という語の出現頻度が高いことがわかる。回答データの使用例としては、「たくさんのことを学びたい今だからこそ、荒馬にも出会えました」、「初めて荒馬を知りました」、「荒馬と触れ合えて良かった」など、授業での荒馬との出会いを新鮮に感じ、実際に荒馬の実践を通して得られた「子どもたちの関わり」や「みんなで一生懸命考えて、協力できた」ことに対する喜びや嬉しさを感じる被調査者が認められた。さらに、「楽しい」に関する回答データからは、このような子どもたちや仲間との関わりだけではなく、「練習すればするほど楽しくなってきた」、「やっていくうちに楽しくなりました」といった、荒馬の練習を通して上達していく自己に対する「楽しい」という感情の変化についても読み取ることができた。

また、「自分」という語についても、「過去の自分ときちんと向き合えて本当に良かった」、「自分ももっと何か積極的にになれるんじゃないか」など、荒馬によって得られた自己の成長への期待や可能性についての気づきが見られた。

その他にも、「教える」という語では、「丁寧に教えてください先生との出会い」、「友達と教え合ったりしながら頑張りました」など、先生から学生へと一方的に「教える」だけでなく、仲間とともに相互に「教える」といった人間関係に関連する内容、「出来る」という語では、「リーダーも安心して最後まで出来た」、「本番も力を合わせて良い発表が出来ました」、「大きな舞台を完成させることが出来る」といった、学生の荒馬への取り組みの結果から得られた成功体験の数々が確認された。

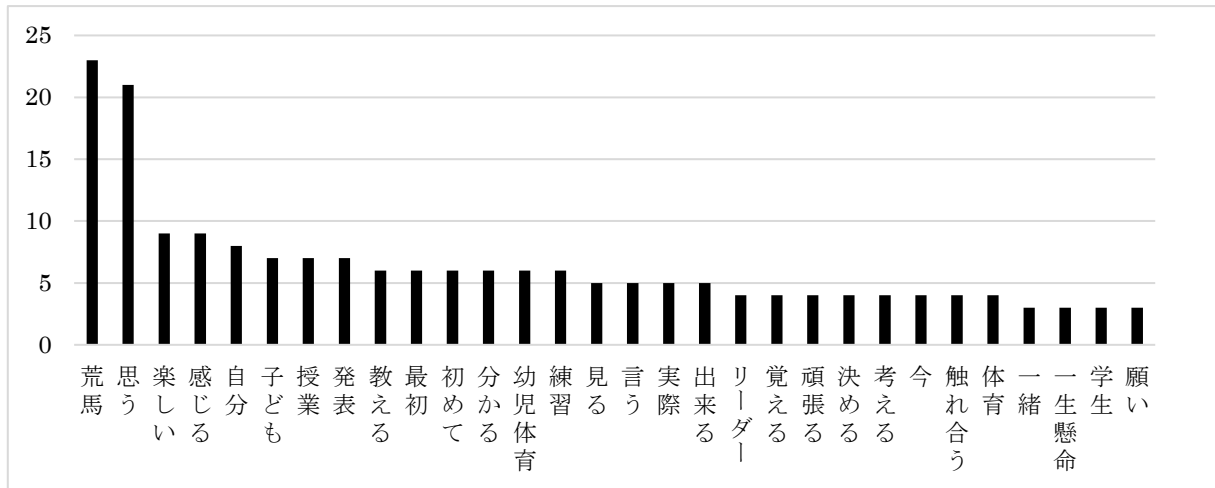


図1 回答データから得られた上位30語の出現頻度

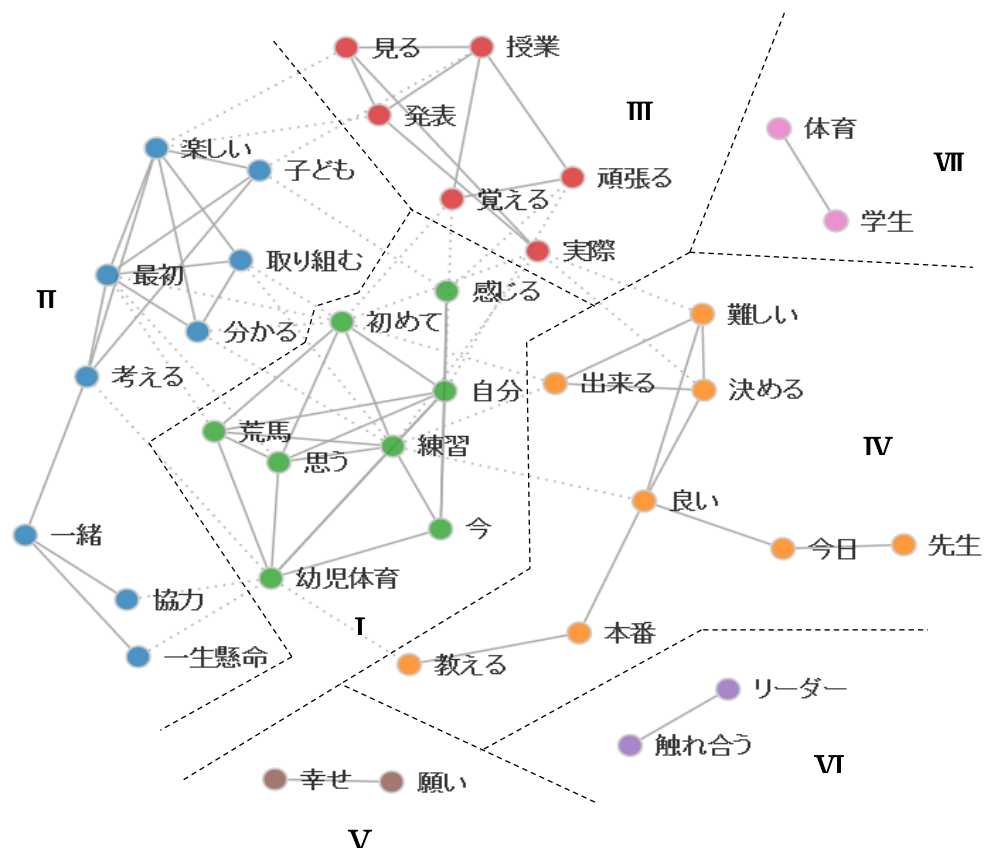


図2 学生まとめレポートに関する共起ネットワーク

3. 語彙の共起関係による分析

1) 共起ネットワーク分析

語彙の出現頻度だけでなく、ある語彙がどの語彙とともに用いられていたのかという語と語の出現パターン、すなわち共起の程度から、探索的にそれらの関係性に着目してカテゴリー化を行った(図2)。なお、図中の破線は、分類した要因の境界線を示したものである。また、共起ネットワークの出力に際して、語の最小出現数は「3」と指定した。

2) 結果と考察

共起ネットワーク分析の結果、まず、形態素分析とも関連するが、出現数の多い語、かつ強い共起関係をもつ内容として、「幼児体育」での「荒馬」との「初めて」の出会い、そして「荒馬」の「練習」を通して「自分」と向き合った経験に関する語のまとめ(Ⅰ)、仲間と「一緒に」に「協力」すること、「子ども」と「一緒に」に「取り組む」こと、さらには自分自身が「一生懸命」に「取り組む」ことによる「楽しさ」などの語の関連(Ⅱ)が認められた。また、共起関係の強さから、「実際」に「授業」で「覚えた」ことや、当日の「発表」で「頑張った」ことなどの客観的事実に基づく学生の経験についての語の関連(Ⅲ)、「先生」から学生へ、そして学生たち同士で「教える」という行為を経て「本番」に向けた「難しい」課題と最後まで向き合うことができたといった語の関連(Ⅳ)が示唆された。

その他にも、個々の共起ネットワークを見ていくと、「幸せ」といった学生たちの荒馬への「願い」との関連(Ⅴ)や、荒馬の取り組みに「リーダー」として「触れ合う」ことのできた経験(Ⅵ)、過去に苦手意識をもっていた「体育」にも「学生」として向き合えたことに関する語の関連(Ⅶ)などが見られた。

4. 学生の民舞「荒馬」経験に関する特徴の分類

形態素分析および共起ネットワーク分析の結果から得られた学生の民舞「荒馬」経験による特徴は表2の通りである。なお、各項目名に関しては共起ネットワークの結果および、KH Coderの文書検索から前後の文脈を判断(e.g., 第1項目では、「荒馬」、「初めて」、「自分」などの語の関連が「荒馬の出会いと自己の成長」という意味で使用されていることを確認)し

た上で、抽出された語の分類と意味の解釈を行った。

表2 学生の民舞「荒馬」経験による特徴

項目内容
I. 荒馬の出会いと自己の成長 初めて荒馬と出会ったこと 練習を通して自分と向き合ったこと 自分の感じると思うことが深まったこと
II. 学びの姿勢と他者との協働的な楽しさ 子どもと一緒に取り組んだこと 仲間と一緒に協力したこと わからなかったことも一生懸命考えたこと
III. 実質的な学びとしての授業の存在 実際に授業を通じて得たこと 授業だけでなく発表も頑張ったこと 授業や発表で相互的に荒馬を見ること
IV. 相互的な学びと本番の達成感 先生(指導者)の教えから得たこと 仲間同士で教えあったこと 最後までやりきって出来たこと
V. 民舞「荒馬」に込める願い 幸せなことを思い願いに込めたこと みんなで願いを込めて披露したこと
VI. 責任感の芽生え リーダーとして荒馬と触れ合えたこと
VII. 自己効力感の向上 体育への苦手意識を乗り越えられたこと

このように、学生の民舞「荒馬」経験の特徴を示す7つの要因が抽出された。すなわち、学生が民舞「荒馬」の経験を通して学んだことや感じたことについて、その特徴の傾向を分析結果から読み取ることができる。それぞれの項目内容について、改めて結果および意味の解釈について記述する。

まず、第1項目については「荒馬の出会いと自己の成長」として解釈した。授業での民舞「荒馬」との出会い、そして練習を通して自分自身と向き合う経験によって自己の成長への気づきに繋がったと考えられる。

第2項目は「学びの姿勢と他者との協働的な楽しさ」として解釈した。学生が一生懸命に学ぶ姿勢で取り組んだこと、実際に現場の子どもたちと一緒に取り組んだこと、仲間と一緒に協力して取り組んだこと、こういった協働的な学びのプロセスを経て最終的に個々の学生それぞれが大きな楽しさを得られたことが伺える。

第3項目は「実際の学びとしての授業」として解釈した。授業での学生の頑張りや、授業の中で見て知った「荒馬」踊り、そして授業の集大成である発表の際に周囲から見られた自身の「荒馬」踊り、こうした授業としての範疇内で実際に得られた学びの経験であると読み取ることができる。

第4項目は「相互的な学びと本番の達成感」として解釈した。外部講師も含めた先生(指導者)からの教えだけでなく、本番に向けた取り組みでの学生同士の相互的な学び合い、様々な困難な課題に対しても最後まで向き合いながら迎えた本番だからこそ味わうことのできた達成感であることが示唆される。

第5項目は「民舞『荒馬』に込める願い」として解釈した。学生のまとめレポートの記述内容だけでなく、実際に形態素分析および共起ネットワーク分析の結果からも、各々の学生が授業を通して「荒馬」に対する思いの願いを込めて取り組んでいたことが伺えた。

第6項目は「責任感の芽生え」として解釈した。学生は「荒馬」の取り組みに際して、それぞれが自身の役割を担いながら、子どもたちや仲間と一緒に「荒馬」と触れ合った。そういった役割を担っていくことで、学生自身もその役割に対して責任感が芽生えていったことが伺える。

第7項目は「自己効力感の向上」として解釈した。過去の経験から体育に対して苦手意識をもっていた学生も、この「荒馬」の実践では当日の本番も練習以上に全力で向き合うことができ、この経験が学生の自信、すなわち自己効力感の向上に繋がったことが考えられる。

以上の結果を踏まえ、本研究の目的である民舞「荒馬」が養成校において果たしうる役割を解明するために設定した以下3点の視点について、以降の総合考察により検討する。

①これまで「教科に関する科目」における「体育」のなかで扱ってきた民舞「荒馬」が、新しい教職課程「領域及び保育内容の指導法に関する科目」「領域に関する専門事項」の「表現」の指導としてどのような教育的効果をもつものであるのか。

②この民舞「荒馬」における学びが、科目横断

的な学びの側面をもつのか。

③若者のつながりの希薄化に関して、民舞「荒馬」の取り組みは人と人をつなげるものであるのか。

IV. 総合考察

1. 民舞「荒馬」がもつ領域「表現」の指導としての教育的効果

まず、養成校における「荒馬」の取り組みが、新しい教職課程における「領域に関する専門事項」の「表現」の指導としてどのような教育的効果をもつものであるかについて考察する。

文部科学省幼児期の教育内容等深化・充実調査研究委託「幼稚園教諭の養成の在り方に関する調査研究」の報告書によると、「領域に関する専門的事項」について「各大学等におけるシラバスを作成する際の留意事項」としては「領域の内容に関わる授業担当者の専門を生かしつつ、モデルカリキュラムの一般目標や到達目標を踏まえ、当該領域に関しての専門的な知識・技能等を修得できるよう、工夫していく」とされている。

そこで、「領域に関する専門的事項」の「表現」のモデルカリキュラム²¹⁾を参照すると、授業「幼児と表現A」の「授業の概要及び全体目標」は「領域『表現』の指導に関する、幼児の表現の姿やその発達及びそれを促す要因、幼児の感性や創造性を豊かにする様々な表現遊びや環境の構成などについて実践的に学び、幼児期の表現活動を支援するための知識・技能、表現力を身に付ける」とされている。また、「一般目標及び到達目標」は「(1) 幼児の表現の姿や、その発達を理解する」及び「(2) 身体・造形・音楽表現などの様々な表現の基礎的な知識・技能を学ぶことを通し、幼児の表現を支えるための感性を豊かにする」とされている。

学生のレポートに対する分析を踏まえ、今回の「荒馬」の取り組みを上目標に照らし合わせると、次のように言えるのではないかと考えられる。まず、全体目標の「幼児の感性や創造性を豊かにする様々な表現遊び」について「実践的に学ぶこと、「幼児期の表現活動を支援するため」の「表現力を身に付ける」こと、さらに一般目標の(2)については、おおむね

達成されている。特に一般目標(2)の下位の目標である「3 表現することの楽しさを実感するとともに、楽しさを生み出す要因について分析することができる」、「4 協働して表現することを通し、他者の表現を受け止め共感し、より豊かな表現につなげていくことができる」については、「荒馬」だからこそ達成できた可能性が指摘できる。

その一方で、一般目標の(1)等については、「荒馬」の取り組みだけでは達成し得ていない可能性が否定できない。今後領域「表現」の指導の中で「荒馬」に取り組む場合は、例えば幼児の発達と領域「表現」の連関に係わる内容を盛り込む等の工夫が必要である。

だがいずれにしても、民舞「荒馬」は領域「表現」の指導として、とりわけ「楽しさ」や「協働」、「他者」と関わって高い教育効果をもつということが出来る。

2. 民舞「荒馬」における科目横断的な学びの側面

続いて、「荒馬」が養成校において科目横断的な学びの側面をもつ可能性について検討を行う。

保育・幼児教育においては、「資質・能力」における所謂「3つの柱」を「一体的に育むよう努める」ことが要請されている。また「5領域」における「ねらいは、幼稚園における生活の全体を通じ、幼児が様々な体験を積み重ねる中で相互に関連をもちながら次第に達成に向かうものであること」に留意する必要があるとされている。さらに先述の「資質・能力」は「5領域」の「ねらい及び内容に基づく活動全体によって育むものである」とされている²²⁾。以上のことから「3つの柱」、「5領域」は個々に分断されたものではなく相互に深く連関するものとして総合的に捉える必要があるとすることができる。

そのことに鑑みると、保育士・幼稚園教員養成課程においても常に各科目の連関を意識しながら授業が体系化されるべきではないかと考えられる。そこで、ここでは一つの試みとして「道徳、総合的な学習の時間等の指導法及び生徒指導、教育相談等に関する科目」である教育方法論との連関について考察する。

「教育の方法及び技術」の科目の一つである教育方法論においては、「これからの社会を担う子供たちに求められる資質・能力を育成するために必要な教育の方法を理解する」ことが一般目標とされている²³⁾。これと先の「3つの柱」及び「5領域」に関する

考察を併せると、各領域における「ねらい及び内容」にかかわる保育・幼児教育の方法を学ぶことは、「資質・能力を育成するために必要な教育の方法を理解する」ことに直結すると言することができる。

そこで、保育所保育指針等を参照すると、領域「表現」においては、ねらい、内容ともに「楽しむ」「楽しさを味わう」ことが重視されていることがわかる²⁴⁾。「楽しい」という語は学生のレポート分析でも出現頻度3位に上がっており(図1)、「荒馬」が領域「表現」のねらいと内容に即するものであることがわかる。なかでも馬の動きを全身で表現し馬を演じる「荒馬」の取り組みは、「自分のイメージを動きや言葉などで表現したり、演じて遊んだりするなどの楽しさを味わう」ことと密接に連関するのではないかと考えられる。また、和太鼓のリズムに合わせて踊る「荒馬」は、「音楽に親しみ、歌を歌ったり、簡単なリズム楽器を使ったりなどする楽しさを味わう」ことの土台をはぐくむ可能性をもっている。

さらに、「感じる」という語が同じく出現頻度3位に上がっていること(図1)からは、「荒馬」が「いろいろなものの美しさなどに対する豊かな感性をもつ」ことや「生活の中で美しいものや心を動かす出来事に触れ、イメージを豊かにする」ことに寄与するものである可能性が指摘できる。

以上のことから、「荒馬」は保育・幼児教育における領域「表現」における「ねらい及び内容」を実現し得る保育・幼児教育の方法の一つであると言えよう。それゆえ、これを「資質・能力を育成するために必要な教育の方法」として位置づけることが可能となり、「荒馬」を学ぶことには教育方法的な学びの側面もあったと言することができるのではないかと考えられる。

ただし、今回「荒馬」を実践したのは養成校の学生であり、子どもたちにおいても同様の教育的効果が得られるかについてはさらなる検証が必要である。また、「荒馬」を教育方法の学びとして位置づけるためには、領域「表現」の授業における「荒馬」実践と連関した教育方法論の授業づくりについて改めて考えねばならない。

3. 人と人をつなげるものとしての民舞「荒馬」

最後に、養成校における「荒馬」の取り組みが人と人をつなげるものであるかという点について考察を行う。

前述の通り、レポートの分析から学生たちが「一緒に「協力」して「荒馬」に取り組んだことが明らかとなった(表2; II. 学びの姿勢と他者との協働的な楽しさ)。「みんなで一生懸命考えて、協力できた」、「少ない人数でも協力すれば、発表会という大きな舞台を完成させることができる」という記述に見られるように、学生たちは「荒馬」の発表会に向けて練習する中で他者と力をあわせる経験をもつことが出来たのではないかと考えられる。今回の分析で頻出語句としては抽出されなかった中にも、「皆で一生懸命することでよりいいものができるんだと思いました」といった記述がみられた。「荒馬」は決して一人の力では完成することができず、また舞踊する人数が集まれば済むというものでもない。一緒に「荒馬」に取り組む者同士がつながりあい、協力することで、良いものを創り上げることができるのである。

養成校において他者とのつながりを経験することの重要性は、保育・幼児教育の現場において求められる保育者像という視点からも強調することができるであろう。文部科学省「幼稚園教員の資質向上に関する調査研究協力者会議報告書」(平成14年6月24日)では、幼稚園教員に「豊かな人間性を基礎に、使命感や情熱が求められる」ということが指摘されている。保育士に目を向けると、保育所保育指針における「保育所職員に求められる専門性」には、「子どもの最善の利益を考慮し、人権に配慮した保育を行うためには、職員一人一人の倫理観、人間性並びに保育所職員としての職務及び責任の理解と自覚が基盤となる」と記されている²⁵⁾。すなわち、保育・幼児教育に携わる者の専門性として「人間性」は必要不可欠のものであることが明言されているのである²⁶⁾。

この「人間性」を豊かにすることについて、教育における「人格のありよう」を追求してきた生活指導に学べば²⁷⁾、そのためには他者の存在が必要不可欠であると言える。例えば竹内常一は「他者とともに世界のなかにあり、他者と応答し合いつつ世界をつくりだしていくという人間的な存在の在り方」こそが「人

間の存在論的な基底」であることを指摘している²⁸⁾。

しかしながら、前述した若者のつながりの希薄化とも関連して、今日子どもたちの生活現実においては「孤立化」が問題となっている。その背景には、「少子化や遊び文化の衰退あるいはゲームなどの遊びの商品化があり、活動を介して子ども同士の人間関係が成立しがたい」ことや、『学力向上』の流れで競争的雰囲気が強まる」ことにより「連帯や共同の取り組みが生まれにくく」なっていることがある。また、携帯電話の普及等により「互いの感情を伴う『生の言葉』に接することが少ない」ことも挙げられる²⁹⁾。

こうした状況をふまえると、現在養成校に在籍する学生の多くが他者を喪失したままに生きてきた可能性を否定することはできない。保育者に不可欠である「人間性」を豊かにするためにも、養成校において他者をつなげる経験を保障することは急務であろう。その課題に応えるものとして、養成校における「荒馬」の取り組みを位置づけることが可能なのではないかと考えられる。

V. 結論

本研究は、O 短期大学の授業実践である民舞「荒馬」が養成校において果たしうる役割について明らかにすることを目的とし、その目的を達成させるために設定した以下3点の視点に基づき、実証的に検討した。

- ①民舞「荒馬」が領域「表現」の指導としてどのような教育的効果をもつものであるのか。
- ②民舞「荒馬」における学びが、どのような科目横断的な学びの側面をもつのか。
- ③民舞「荒馬」の取り組みは人と人をつなげるものであるのか。

研究の実際として、授業実践の概要を捉えたうえで、質的データである学生のレポートに関して内容分析を行った。質的データの分析方法として、探索的かつ量的な視点による分析を可能とした計量テキスト分析を用いた。

その結果、学生の「荒馬」経験の特徴として、「荒馬の出会いと自己の成長」、「学びの姿勢と他者との協働的な楽しさ」、「実際的な学びとしての授業」、「相互的な学びと本番の達成感」、「民舞『荒馬』に込める

願い、「責任感の芽生え」、「自己効力感の向上」を示す7つの要因が抽出された。

これらの分析および本研究の目的である3つの視点による考察の結果、以下のことが明らかとなった。第一に、民舞「荒馬」は新しい教職課程における領域「表現」の指導として、特に「楽しさ」や「協働」「他者」と関わって、高い教育的効果をもつものであるということ。第二に、これは養成校において教育方法学的側面も含めた科目横断的な学びの可能性をもつということ。第三に、授業を通じた「荒馬」の実践は人と人をつなげるものとして、今日の学生が抱える他者とのつながりの希薄化といった課題に応えるものであるということである。

今後の課題としては、民舞「荒馬」を領域「表現」の指導に取り入れる際、特に「荒馬」では達成されなかった「領域に関する専門的事項」における「表現」の目標を視野に入れながら、授業全体を構築することが挙げられる。また、子どもたちにおいても「荒馬」が保育・幼児教育における領域「表現」のねらいと内容を満たしうるか検証するとともに、養成校における「荒馬」実践と連関した教育方法論の授業づくりについて考える必要がある。他日を期したい。

参考文献／引用文献／脚注

- 1) 領域「表現」に関するものとして(佐藤みどり,「保育者養成課程における『身体表現』科目の学習内容の検討—アクティブラーニングに視点を置いた分析」,『淑徳大学短期大学部研究紀要』,57,2017,109-121)等が挙げられる。
- 2) 高砂朋子・永谷孝代,「実習を軸とした本学独自科目『保育基礎ゼミ』と実習指導の連携についての現状と課題」,大阪健康福祉短期大学紀要『創発』,18,2019,31-39.
- 3) 平成24年8月中教審答申「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～」
- 4) 前掲書2, p.35.
- 5) かいでんまさのり,「子どもの心を躍らせる民舞の魅力とは」,『季刊保育問題研究』,249,新読書社,2011, p.22.
- 6) 中森孜郎,『日本の子どもに日本の踊りを』,大修館書店,1990, p.55.

- 7) 内閣府「若者にとっての人とのつながり」『平成29年版 子供・若者白書』
- 8) 三浦和恵,「人はつながって生きていく～荒馬踊りを教材にして～」,『季刊保育問題研究』,249,新読書社,2011, 6-19.
- 9) 前掲書6, p.68.
- 10) 平野内昌夫,「今別の荒馬『昔の事を想像してみる』」,『全国今別荒馬のつどい～第10回今別荒馬サミット～配布資料』,2014.
- 11) 「青森県史の質問箱02」,『青森県庁ホームページ』,<http://www.pref.aomori.lg.jp/bunka/culture/shitsumon02.html>, 2019.9.27
- 12) 主な役割: リーダー・サブリーダー・発表会宣伝ポスター係・健福祭係
- 13) 樋口耕一,「テキスト型データの計量的分析—2つのアプローチの峻別と統合」,『理論と方法』,19(1), 2004, 101-115.
- 14) 樋口耕一,「内容分析から計量テキスト分析へ—継承と発展をめざして」,『大阪大学大学院人間科学研究科紀要』,32,2006, 1-27.
- 15) 樋口耕一,『社会調査のための計量テキスト分析—内容分析の継承と発展をめざして』,ナカニシヤ出版,2014, p.15.
- 16) 西川純,『新版 実証的教育研究の技法—これのできる教育研究』,大学教育出版,2000, 92-95.
- 17) 前掲書13.
- 18) 前掲書14.
- 19) 前掲書13.
- 20) 前掲書15, p.125.
- 21) 無藤隆編著,『幼稚園教諭養成課程をどう構成するか～モデルカリキュラムに基づく提案～』,萌文書林,2017, p.54.
- 22) 『平成29年度告示 幼稚園教育要領 保育所保育指針 幼保連携型認定こども園教育・保育要領』チャイルド社,2017年.
- 23) 高木展郎,「教育の方法及び技術」,横須賀薫監修,『概説 教職課程コアカリキュラム』,ジダイ社,2018, p.124.
- 24) 前掲書22.
- 25) 前掲書22.
- 26) 保育者の専門性について「人間性」に焦点をあてて考

察したものとして（竹石聖子，「保育者の専門性についての一考察——『人間性』と『専門性』に着目して」，『常葉学園短期大学紀要』，42，2011，95-103）等が挙げられる。

27) 春田正治，『ほるぷ現代教育選集 26 生活指導とは何か』，明治図書，1984，p.13.

28) 竹内常一，『新・生活指導の理論——ケアと自治・学びと参加』，高文研，2016，p.258.

29) 折出健二，『対話的生き方を育てる教育の弁証法——働きかけるものが働きかけられる』，創風社，2018，84-85.

A Study of the Folkdance Arauma in a Childcare Training School: Relationship between the Teaching of “Expression” and Educational Methods

Shiota Momoko*, Hirayama Yuuki**, Hoshikawa Yoshika**

Abstract

The purpose of this study was to clarify the effect of the folkdance *Arauma*, which was an educational practice at “O” college, a childcare training school. By analyzing student's reports using quantitative text analysis, seven factors were extracted that were characteristic of the student experience of *Arauma*: “Encounter with *Arauma* and self growth”, “Learning attitude and the pleasure of collaborating with others”, “Class as practical learning”, “Mutual learning and sense of achievement”, “A wish to be included in the *Arauma*”, “A budding sense of responsibility”, and “Improving self-efficacy”. Based on that, the following things were clarified. First, *Arauma* has an educational effect as an “expression” in the new teaching course, especially related to “pleasure”, “collaboration” and “others”. Second, this is subject-wide learning. Third, it builds relationships among peoples and it could respond to any distress among the students.

Key words: *Arauma*, expression, educational methods, physical education for pre-school children, content analysis

*Osaka College of Social Health and Welfare
Contact Address : Shiota Momoko
〒590-0075 2-3-20 Minamihanadaguchi-cho, Sakai-ku, Sakai City, Osaka
Osaka College of Social Health and Welfare
Department of Child Care and Welfare
E-mail : momo@kenko-fukushi.ac.jp
**Osaka College of Social Health and Welfare